

古くから日本に伝わる **G.calochlorum**(和名; 火星丸)と **G.calochlorum** 変種 **proliferum**(和名; 唐子丸)は、外観や花において色々なタイプが見られ、交配種・園芸種となっています。特に **G.calochlorum** 変種 **proliferum**(和名; 唐子丸)は、最近の海外からの輸入した種子からのものとは、大分、趣が異なります。10 年以上前に、オーストリアギムノ研究グループ(AGG)の Hans Till 氏は、雑誌 *Gymnocalycium* で Spegazzinii 博士が学術記載した、**G.parvulum** は、**G.calochlorum var. proliferum** と同じであり、原記載が優先され、**G. parvulum** が正しい学名であるとの説を発表しました。(G.parvulum AGG 1994 *Gymnocalycium* 7(2) 1994 P121-126)

この論文にある、**G.parvulum**=**G.calochlorum var. proliferum** の写真は、日本で古くから流通し、唐子丸とされている植物とは違いますが、最近の **G.calochlorum var. proliferum** として輸入された種子からの植物に一致しているように思います。(写真 1,2,3 参照)

ここで、最初の Spegazzinii 博士の学術記載が、AGG *Gymnocalycium* 誌に載っていますので紹介します。



写真 1; H.Till 氏が発表した **G.parvulum** 右が典型種、左が日本の唐子丸を思い起こす刺の長いもの。

AGG 誌 *Gymnocalycium* 7(2) 1994 のコピー

……胴体は球形から楕円形、小さいあるいはごく小さい、(直径と高さ 10mm から 30mm)、汚れた灰緑色、稜は真っ直ぐ、大抵 13 個、先が丸く、多くのコブに切り分けられている。刺は 5 本から 7 本、殆ど剛毛形状、しばしば、あっちこちに曲がり、強く押し付けられている。長さ 2mm から 4mm、灰色から白色、全て放射状。花は垂直、胴体に対して比較的大きい、長さ 45mm から

60mm、スリムな花筒部は白い花弁より長い。

Nuevas Notas Cactologicas での移動組み合わせは以下のとおり。

43 **Gymnocalycium parvulum**=**Echinocactus platensis** *Speg. var. parvulus* *Speg.*、産地：San Luis 近くの山脈の、非常に石の多い、乾燥した丘陵の上。観察：この種の、私のメモとスケッチでより注意深く研究した後に、以下に続く特徴のため、それは **Gymnocalycium**

platense (Speg.) Speg.の変種ではなくて、立派に異なった、自立した種であるという確信を持った。……

この Spegazzinii 博士の **G.parvulum** に関する記述を調査した AGG の Hans Till 氏は、**G.parvulum** の産地を特定し、同じ論文で以下のように書き、**G.parvulum**= **G.calochlorum var. proliferum** であるとしています。

……その場所は Villa Cura Brochero と Panaholma の間の道路上にある。この道は、以前



写真2；森の木氏から頂いた輸入種子と思われる **G.calochlorum var. proliferum** 筆者 栽培・撮影



写真3；**G.parvulum** BKS171 谷山 幸氏 栽培・撮影

は車の通行が凄く多かった。そして Villa Dolores から有名な場所を越えて、更に Salsacate、San Carlos、Villa de Soto、Curz de Eje へ通じている。Villa San Luis 近くで、豊富な個体数で、

出会う植物は全く完全に **Gymnocalycium parvulum (Speg.) Speg.**の学術記載に一致する。けれども、それらは一般的に **G.proliferum (Backeberg) Backeberg**、もしくは **G.calochlorum (Bod.)Ito var. proliferum (Backbg.)Backbg.**と呼ばれている。つまり後者の名前の場合、既

表1 G.calochlorum 類縁種の学名記載 時系列

記載年	学名と文献(Texa and Literature)
1923	Frailea bruchi Spegazzini Anales de la Sociedad Cientifica de Argentina 96: 73-75 (1923).
1925	Gymnocalycium parvulum (Spegazzini) Spegazzini Nuevas Notas Cactologicas.-Anales de la Sociedad Cientifica de Argentina 99: 141 (1925).
1926	Gymnocalycium bruchii (Spegazzini) Hosseus Apuntes sobre las Cactaceas.-Revista del Centro Estudiante de Farmacia 2(6): 16 + 22 (1926).
1932	Echinocactus calochlorus Bödeker Echinocactus calochlorus Böd. sp.n.-Monatsschrift der DKG 4(11): 260-262 (1932).
1932	Echinocactus prolifer Backeberg Echinocactus (Gymnocalycium Br.u.R.) prolifer Backeberg n.sp.-Der Kakteenfreund1(12): 132-133 (1932).
1935	Gymnocalycium proliferum (Backeberg) Backeberg in Backeberg & Knuth: Kaktus ABC: 294-295 (1935). Basionym: Echinocactus prolifer Backeberg 1932.
1936	Gymnocalycium albispinum Backeberg in Backeberg & Knuth: Kaktus ABC: 285, 416 (1936)
1952	Gymnocalycium calochlorum (Bödeker) Y.Ito Cacti 1952: 90 (1952). Basionym: Echinocactus calochlorus Boedeker 1932.
1959	Gymnocalycium calochlorum var. proliferum (Backeberg) Backeberg Die Cactaceae 3: 1718 (1959). Basionym: Echinocactus prolifer Backeberg 1932.
1994	Gymnocalycium parvulum var. amoenum H.Till var. nov. von Gymnocalycium parvulum (Spegazzini) Spegazzini.-Gymnocalycium 7(2): 125-126 (1994).
2001	Gymnocalycium papschii H.Till G.papschii AGG Gymnocalycium 14(3): 405-408(2001)

に良く知られた一族の更新された命名が問題になっている。もし、Backeberg氏が、彼には良く知られていた Spegazzini 氏の出版物をもっと良く研究していれば、それは避けることが出来たであろう。なぜなら、その当時 **G.parvulum** と **G.bruchii** 以外に大きさが 1cm から 3cm でこの類縁関係の種は、全く知られていなかったから。……

(表 1 **G.calochlorum** 類縁種の学名記載 時系列 参照)

Backeberg氏は、**G.parvulum** については、一応、記述していますが、記述の最後に次のように書いています。

……Spegazzini氏は、後になって、この種を良系統として区別した。花の花柱が **G.platense** より短いと言う事である。私は、栽培しているこの種を見たが、それは全く、**G.quehlianum** の形態グループに属するものと思える。但し、少し小型種と言える。……

Backeberg氏が **G.parvulum** として考えていたのは、**G.quehlianum**(現在は、H.Tillの説が認められて **G.stellatum** である。)の小型のタイプだったと思われる。実際、30年以上前に **G.parvulum** として、ドイツのウインター商会から種子として日本に入ったものは、**G.stellatum** の小型タイプです。

(写真 4 参照)

伊藤芳夫氏は、サボテン図説 1957 の中で **G.calochlorum**(和名;火星丸)とその変種

proliferum(和名;唐子丸)について記載し、**G.calochlorum**(和名;火星丸)については、以下の



写真 5; 伊藤芳夫氏の火星丸
(**G.calochlorum**)
サボテン科大図鑑 1981 コピー



写真 6; 伊藤芳夫氏の唐子丸
(**G.calochlorum** var. **proliferum**)
サボテン科大図鑑 1981 コピー



写真 4; 山田藤次郎氏実生のウインター **G.parvulum** 現在は **G.stellatum** 筆者 栽培・撮影

ように記載しています。しかし、Backeberg氏により Die Cactaceae Band III 1959 の中で、伊藤氏は **G.calochlorum**(和名;火星丸)と変種 **proliferum**(和名;唐子丸)を取り間違えていると指摘されていますので、以下の記載は、唐子丸の火星丸との違いを意味することになります。

……(6) 火星丸(唐子丸が正しい)

(15) **Gymnocalycium calochlorum** Y.Ito, 1952. (**Echinocactus** Boed.1932. **Gymnocalycium proliferum** var. **calochlorum** Bckbg, 1935)

火星丸(唐子丸が正しい)について形態 その異学名のように、一部においては唐子丸(火星丸が正しい)の変種として取扱われているほどよく似ているが、詳細に観察すると、かなりの相違点が見出される。以下なるべく相違の点を記載して見よう。

より大きく育つ(径 3-8cm)。体色はより淡色の深緑色、乃至は草緑色。稜はより多く、10-15で、より瘤状がかつている。刺はより細く、より多く(10-13 本)、しかもより長く(1.5-2.5cm)



写真 7; 一般的な日本の火星丸
(*G.calochlorum*) 谷山 幸氏 撮影

妙にくねって、体に密着している。刺の色はよりあざやかである。花 花筒はより細長く(6-6.5cm)、青褐色を含んだ白色。果実はより大きく、長さ約 3.5cm、径約 2cm。……

伊藤芳夫氏は 1981 年に彼が発刊したサボテン科大図鑑では、これを訂正しています。しかし、

G.calochlorum(和名;火星丸)の写真は、カラーの大きな写真を載せ、*G.calochlorum var. proliferum* は *G.calochlorum* の花色が違うとし、Backeberg 氏からのものとする白黒写真を載せています。(写真 5,6 参照)

火星丸の写真は、日本で一般的に流通しているものに近いですが、*G.calochlorum var. proliferum*(和名;唐子丸)は、少し違うように思います。伊藤氏は日本で流通している唐子丸を知っていたはずですが、良く分からないので、解説を意識的に避けたの



写真 8; 黒田芳明園が輸入した原産
地球の火星丸(*G.calochlorum*)
筆者栽培・撮影

かも知れません。(写真 7,8,9 参照)

Hans Till 氏は、前述の *G.parvulum* に関する記載で、Backeberg 氏が Die Cactaceae Band III 1959 の中に掲載されている、*G.calochlorum* や *G.calochlorum var. proliferum* の写真は、間違っている場合が多いとし、以下のように述べています。

……写真 1649 で、Backeberg 氏はこの 2 つのタイプに関する知識の少なさを証明した。彼



写真 9; 日本で流通している唐子丸の一つの
タイプ 交配種の可能性が高い
谷山 幸氏 撮影

はこれを“基本種と変種の花の大きい中間種、あるいはそれらの交配種”と呼んでいた。事実上、この写真は **Echinocactus calochlorus** Bod.の基準標本 (Typform) の Bodecker 氏の学術描写 (1932 年) を指し示している。……

Backeberg 氏の Die Cactaceae Band III 1959における **G.proliferum var. calochlorum** Bckbg, 1935 の解説は、以下のようになっています。

……球体は、濃い緑色から、褐色掛かった緑色までである。根は大きな大根状の根が群がり、後で、球体の基部が膨らむ。個々の球体はおよそ直径 5cm になる。頭頂はいくらか凹んでいて、多少柔らかい綿毛がある。稜は 12 稜まであり、幅は 8mm 迄。アレオーレの基部は多少



写真 10; 日本で流通している唐子丸の一つのタイプ 交配種の可能性が高い
筆者 栽培・撮影



写真 11; 庵田氏より頂いた唐子丸 交配種かどうか不明
筆者 栽培・撮影



写真 12; 庵田氏より頂いた唐子丸 花筒が短く **G.bruchii** に近い、交配種の可能性が高い。
筆者 栽培・撮影

丸く瘤状に隆起し、その下に横溝がある。アレオーレは各々 1.5cm 間隔で、直径は 1mm 程。刺は 13 本まで、そのうち 2~3 本少ない事もあり、時には 6~7 本しか無い事もある。そして、長さは 11mm を越える迄になり、寝ている。この種の原因種 (**G.calochlorum**) より、はるかに長く、もつれていて、黄味掛かったホワイトローズ色である。花は比較的堅く、長い青白色の花筒で、花弁は、この種の原因種より遥かに長く、大きく先端が曲がっている。花弁は褐色を帯びたホワイトからばら色や、真っ白の物までである。そして、花底がバラ色の物も時々見られる。果実は、長く、青緑の幅広い鱗片が付いている。種子は黒色。球体は、暗い物から明るいグリ

ーンのタイプまでである。頭頂は、刺は少なく、アレオーレは長さ 7mm 程、幅 4mm 程である。そして、割合長く、黄色い厚地の綿毛が付く。 原産地-----アルゼンチン……

この解説で、特に気にかかるのは、花色がいろいろ書いてある事です。この時点で Backeberg



写真 13；G.calochlorum(v.ploriferum)
P109 David Hunt 博士 他
The New Cactus Lexicon コピー

氏は、**G.calochlorum** 変種 **proiiferum**(和名；唐子丸) に関して、交配種、又は複数の異なる種について、解説しているように見えます。日本で古くから流通している唐子丸は、この解説に当てはめる事が出来ます。単なる想像に過ぎませんが、その多くは **G.fleischerianum**、**G.paraguayense**、**G.bruchii** などとの交配種、又は別の種では、ないかと考えられます。(写真 9,10,11,12 参照)

Pilbeam 氏の本 *Gymnocalycium* 1995 では、**G.calochlorum** 変種 **proiiferum** は、**G.calochlorum** と比べ、より大きい体型、より青い肌色、より大きく、より大きく開く花、そり返る花弁により異なるが、単なる変異の中であり、同じ種と見なしています。また、種を大きく捉える David Hunt 博士らも最近の著書 *The New Cactus Lexicon* の中で **G.proiiferum** は、**G.calochlorum** であるとしています。写真の Field 番号 P109 は通常 **G.calochlorum v. proiiferum** とされている種です。(写真 13 参照)

G.parvulum= **G.calochlorum var. proliferum** とされている種に近いものが、日本では **G.albispinum Backeberg**(和名；銀星玉) として流通

しています。花の形や大きさ、色から見ると **G.parvulum**= **G.calochlorum var. proliferum** で



写真 14；銀星玉 谷山 宰氏 撮影

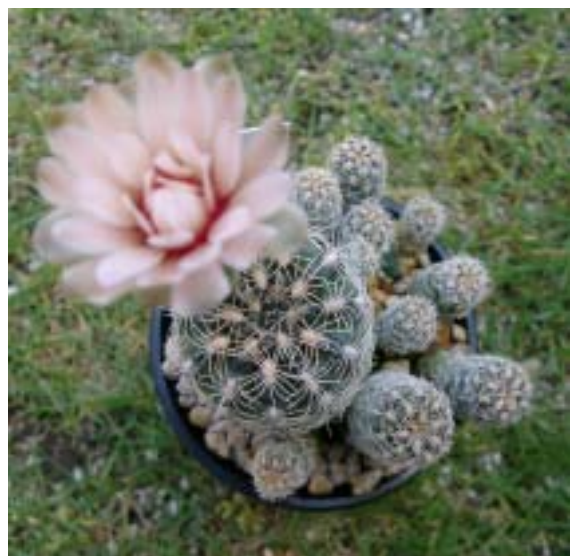


写真 15；銀星玉 筆者 栽培・撮影

はないかと考えられます。(写真 14,15 参照)

一方、Backeberg 氏や伊藤芳夫氏の **G.albispinum** の解説は、**G.bruchii**(和名; 羅星丸)に近い解説をしています。実際、最近の文献で Gert Neuhuber 氏は、大型になる多くの **G.bruchii** の変種や品種とされた種に対して、**G.bruchii (Speg.)Hosseus subsp. lafaldense (Vaupel)Neuhuber** であると言う提案をし、**G. albispinum(=G.bruchii var. albispinum)**は、**G.bruchii (Speg.)Hosseus subsp. lafaldense** の異名同種としています。(G.bruchii AGG 2003 *Gymnocalycium* 16(2) 2003 P 499-510)

最近、**G.bruchii** にも **G.parvulum** にも分類すること出来ない **G.parvulum** に非常によく似た種として H.Till 氏は、新種として **Gymnocalycium papschii H.Till** を学術記載しています。この種の **G.parvulum** との違いとして **G.parvulum** は、古くなると側芽を形成するのに対し、**Gymnocalycium papschii** は頭頂部に損傷を受けた時にのみ側芽を出し、人工栽培しても 1 個の側芽も観察されることは無く、更に、相違する特徴として、長さ 5mm 程度の細い刺座が付いた、20 個程度の分厚い、重なり合って配列されたアゴ形状の隆起が付いた鋭角の稜であるとしています。(G.papschii AGG 2001 *Gymnocalycium* 14(3) 2001 P405-408)



写真 16; **G.papschii** STO92-521 Pilz 種子
土屋氏実生 島田寿男氏 栽培・撮影

日本に古くから入り、津田宗直氏が戦前に命名したとされ、良く取り間違えられている火星丸と唐子丸について、過去の文献を調べながら書いて見ました。日本で火星丸と流通しているものは、文献に書かれているものと大きな差はありませんが、唐子丸として流通しているものは、文献に書かれている内容とは、大分異なるように思います。日本で、唐子丸とされているのは、**G.fleischerianum**、**G.paraguayense**、**G.bruchii** などとの交配種である可能性が高いのではないかと考えられます。

終わりに、本稿を書くに当たり、谷山 幸氏と島田 寿男氏の写真を使わせて頂きましたことに感謝致します。

参考文献

- 伊藤芳夫(Y.Ito) サボテン図説 Explanatory Diagram of Austroechinocactinae 1957
Curt Backeberg Die Cactaceae BandIII 1959
伊藤芳夫(Y.Ito) サボテン科大図鑑 1981
Hans Till G.parvulum AGG *Gymnocalycium* 7(2) 1994 P121-126
John Pilbeam *Gymnocalycium* A Collocrot's Guide 1995

Wolfgang Papsch *Gymnocalycium* Check List 2000
Hans Till *G.papschii* AGG *Gymnocalycium* 14(3) 2001 P405-408
Gert Neuhuber *G.bruchii* AGG *Gymnocalycium* 16(2) 2003 P 499-510
David Hunt, Nigel Taylor, Graham Charles *The New Cactus Lexicon* 2006